

台湾の高校生 60 名、九州に招聘

(財) 交流協会では日台青少年交流の一環として、2008 年 2 月に台湾の高校生 60 名を、2009 年 2 月には 100 名を招聘し、台湾における知日派育成に努めてきました。昨年度は 2010 年 2 月上旬に台湾各地から選抜した高校生 60 名のグループを、そして 2 月下旬にはスポーツチーム(チアダンス 20 名、サッカーチーム 20 名) グループを本邦に招聘しました。

そのうち台湾の高校生 60 名のグループは、2010 年 2 月 4 日から 12 日まで 8 泊 9 日の日程で福岡県と大分県を中心に訪問しました。そして日本の高校生との交流、農村宿泊体験、福岡県知事の表敬訪問などを行い、日本への理解を深めてもらいました。訪日団に参加した生徒たちは帰国後、日本で経験したことや感じたこと、学んだことなどを報告書にまとめてくれました。今月号の『交流』では、九州に招聘した高校生 60 名のうち男子生徒 1 名、女子生徒 1 名の報告書(日本語訳)をご紹介します。

2009 年度台湾高校生訪日団(九州組) 「一期一会、九州との約束」

第 1 組(4 番)

氏 名：邱舒虹

学 校：暁明女中

ここ何日か、年越しの音楽や爆竹の音が耳に入るにぎやかな時間が続いていましたが、私の心は浮かないままで、ある気持ちが消えていくのを感じていました。まだ荷物を取り出していない置きっぱなしのスーツケースには、名残惜しく離れた日本でのあの一時が詰め込まれています。腕時計が時を刻むにつれて、最近やっと思い出が変わってきました。私はキーボードを打ちながら、この九日間のテーマを何にしたら言いか考えました。私達が日本で経験したことを表すにふさわしい言葉はなんだろう。——「一期一会」。私は記憶の中から、三日目の農業体験を思い起こしました。ホームステイした農家の和室に掛けてあった四文字。私達が農家のお母さんにどういう意味か尋ねると、「一生に一度しか会えない気持ちでつきあいましようという意味よ」と教えてくれました

た。一生で一度の出会い、私達が九州を訪れたこのチャンス、みんなに出会えた縁、これらはみな一生に一度のめぐりあいです。毎年咲く花と違って、人は同じ出会いに二度とめぐり合うことはありません。だからこそ、一生に一度の縁を大切に、一瞬一瞬は消えてしまうけど、文章や写真で記録します。今回のテーマを「一期一会」にしたのは、これが一生に一度の文化的な宴で、参加した人が帰るのを忘れてしまうようなそんな宴だからです。

福岡に向かう飛行機の中で、期待は高まりました。窓の外の景色を眺めると、あっという間に雲に飲み込まれ、広がる雲が真っ赤な夕日を写していました。心まで広がって、この世界には境界なんてないようで、どこにいても、どこもが自分のステージのように感じられました。私は自分の夢が飛行機の翼と一緒に、より高く、より遠くに飛んでいくように感じました。そして夜になって到着した福岡。星々のようにまばゆい臨海都市から、すべてが始まりました。

第一ステーション：歓迎会

福岡での二日目、交流協会が私達のために歓迎

会を開いてくれました。いまだ記憶に新しいのは、年の離れた人たちがグループになって演奏してくれた太鼓です。彼らの一叩き。太鼓の音は私達の心を突き抜けるかのようで、リズムに乗った旋律に合わせて鼓動が胸を震わせるかのようでした。演奏者の汗がばちに合わせて零れ、精神を一身に集中させた太鼓の音は、人を惹きつけるような魔力を具えていて、演奏が終わった後も、なかなか落ち着きませんでした。なるほどこれが日本の伝統的な精神なのかと感じました。演奏者のグループは、この意義ある文化を継承したいという共通の趣味と使命を持っているため、仕事以外でも一緒に過ごしているそうです。幸いにも私達は彼らのパフォーマンスを鑑賞することができました。伝統文化に対する彼らの強い信念からは学ぶべきものがあると思います。

第二ステーション：農村体験



この旅で何が最も印象深かったかと聞かれれば、私は間違いなく農家体験と答えます。農家体験は、都市

で体験したことのない田舎の生活を味わわせてくれただけでなく、一番大切な贈り物、すなわち素朴さと真心をくれました。私のグループのお母さんはとても明るい方で、たくわんの漬け方、お餅、おにぎり、お好み焼きの作り方を教えてくれました。私達が口にしたのは全部お母さんの手作りだったので、格別おいしく感じました。私達は、何かをしてこそ得られる充実感を感じ、また食べ物を粗末にしないことを学びました。私達と農家のお母さんは本当の家族のように和気藹々と料理をし、おしゃべりをしました。パソコンやテレビ

がなくても、生活を楽しむことができ、単純な幸せとはこういうものだったんだと感じました。これが農家体験を通じて得られた考え方です。夜になって、あわただしく分厚い布団を敷きましたが、思いがけずホコリアレルギーの友人が発作を起こしてしまいました。お母さんは心配そうに、ずっとその子につきっきりで、状況が落ち着くまで心配そうにしていました。心から私たちのことを気にかけてくれ、家族の一員としてくれていると感じました。別の国から来た私達で、しかもたった一泊二日の滞在でしたが、彼らの温かいもてなしを深く感じました。手を振る人影がだんだんぼやけていくのを見ながら、寒い九州には温かい人情を持ち、素敵な笑顔をくれる人がいると感じました。

第三ステーション：スノーボード体験

揺れの激しい道程に耐え、私達はやっとスキー場に到着しました。軽やかにすべる人を見て、スノー



ボードはそんなに難しいはずはないと自分に言い聞かせましたが、初めてストップのレッスンをしたときには転んでしまいました。方向をコントロールするときも失速してしまったので、「難しい」という考えは消えました。でも、最後には「転んだって、立てばいい」という気持ちで、リフトに乗って山を上がりました。転げながら下りてきましたが、滑り終わった後はとても興奮していました。時にはやり遂げるのが難しいと思うことにぶつかるけど、克服しようと思って頑張れば、なんとかなるんだと思いました。徐々にスノーボードをマスターしてくると、氷上で自由に

舞うように視野が広がり、過去に見過ごしてきた素敵な風景にも気が付きました。スノーボードはスピードの快感だけでなく、コントロールすることの感動、挑戦する達成感を教えてくれました。あの日、私達は嬉しい気持ちで下山しました。

第四ステーション：

九州産業大学付属九州高校での交流



やっと待ちに待ったスケジュール、高校生との交流の時間がやってきました。校門をくぐると、中華民国

の国旗を振って出迎えてくれる学生が目飛び込んできました。私達が通る時には並んで拍手してくれたので、すぐに彼らの情熱と友好を感じました。出迎えの笑顔一つが、見知らぬお互いをこんなに近づけてくれるんだと思いました。これが高校生からの最初のサプライズでした。私達はそれほど大きくはない講堂に連れて行かれ、日本の高校生に囲まれて座り、楽しくおしゃべりしました。いつも同級生と話すような自然な感じで、誰かと向き合おう、相手を理解しようという気持ちさえあれば、言葉はそんなに大きな問題ではないと感じました。この学校の学生達はとても仲良しで、助け合うだけでなく、外から来た私達にも熱心に積極的でした。校長先生は美術の先生で、話の中から、彼らは絵を描くのが好きなだけでなく、自分の得意とするところにとっても自信を持っており、これが彼らの活力の源なのだと感じました。別れの前、彼らは私達の似顔絵をデッサンして、記念に贈ってくれました。この絵をずっと大切にしようと思います。何年後にこの絵を見たら、当時の感動と初心を思い出して笑みがこぼれること

でしょう。

第五ステーション：桃園空港での別れ

飛行機が無事に桃園空港に着陸し、私の気持ちも飛行機と一緒に降り立ちました。この九日間は心で繋がっていたふるさと台湾で、各自、出発の時よりも重くなったスーツケースを引きながら、軽い足取りで税関を通ると、九日間の生活、例えば左側を歩く、入り口に立たない、「ありがとう」を言うといった習慣が既に体の奥深くにしみ込んでいることに気が付きました。

ゲートをくぐると、台湾に対する不慣れな印象と、年越しの雰囲気私達を包みました。もうすぐ台湾の旧正月であることを思い出し、それへの親しみを感じました。みんなと別れた後、外で待っていた父母を見ると、走って行って「会いたかった」と言いました。だけど心の中では「日本が懐かしい」と小さな声でつぶやきました。私の心の一部はまだ九州に残っていて、雨降る福岡でひっそりと芽吹いています。

夢は八泊九日を駆け抜け、より大きく、より重いものになりました。今回の活動に参加して、私達がどれほどラッキーなグループだったか知りました。特別な方法で日本に接し、日本を理解することができ、同時に私達は肩に責任を背負ったグループになりました。私達は他の人よりもより深く日本の温かさ、独特さを体験したのだから、日台の架け橋となって、より多くの人に日本の良さを知ってもらい、学んだことを自分達の社会に反映させていかなければと思います。私達に日本の美しさを見る機会を与えてくれた財団法人交流協会のお招きに感謝いたします。また、随行して下さった徐芝玲先生、陳素玲さん、永吉さん、アテンドの方々、寒い中、素敵な思い出をありがとうございました。

2009 年度台湾高校生訪日団（九州組）
「体で語る。福岡」

第 2 組（50 番）
氏 名：高振原
学 校：育達高職

「充実」——この二文字が、今回の日本研修の意義を十分に表しています。

採用通知をもらったときの胸の鼓動は、いまでも忘れられません。日本に行くことは、私にとって長年の夢だったからです。今回の日本での交流事業は、金銭的にも家族に負担をかけることなく、自分の夢を実現させることができるというもので、私にとっては一石二鳥のチャンスでした。だから私はこの活動に応募しました。

日本へ行くまで、私にとってこの国は未知の世界でした。私は長く日本語を勉強してきましたが、家族や先生からいくらそれを褒められようと、心の中の虚しさはなかなか埋めることができませんでした。それは、日本語というこの言語が、全く用を足さないものであるかのような感じがしたからです。科学技術が発達した現在、私たちはインターネット、テレビ、書籍などを通して、いろいろな方法で他国の情報を得ることができます。しかし、これらが描き出すのは、真実性に欠けた美しい景色と、心に響いてこない旋律でしかありません。台湾にいて、たまに日本人とすれ違うことがあっても、自分から挨拶をしに行こうとは思いません。私にとって日本という国は、まるで蜃気楼のようで、近いようで遠いようでもありました。しかし、今回の日本研修は私の考えを 180 度変えることになりました。私に与えた意義の大きさは、言葉で言い表せないほどです。

今回の日本研修で最も忘れがたいのは、ほかの生徒たちの心にも深く残っている「農村体験」です。私たちが到着すると、農家の家族たちは急い

でてきて私たちを迎えてくれました。私たちのグループは玄関に足を踏み入れるなり、心のこもった歓迎を受けまし



た。彼らは、私たちがお腹をすかせていないか、着るものが少なくて寒さを感じていないか、至る所で私たちのことを気にかけていることが分かりました。それはまるで本当の両親のようで、至れり尽くせりのお世話と親しみを込めた愛情は、私の心を動かしました。この期間、私たちは日本人の生活や飲食を実際に体験することになりました。そして、現地の人たちの息づかいを感じることができました。これこそ、今回の訪日研修での最も充実した収穫ではないのでしょうか。たった 1 泊 2 日の短い滞在でしたが、互いの情愛にもともと境界はなく、他の生徒たちとの友情もしっかりと結ばれました。最後に農家の人たちと別れるとき、互いに涙を流しながら別れを惜しむ情景を至るところで見ました。それを見ると自分も感動し、感傷的な気持ちになりました。



次に、私が忘れられないのは九州高校での交流です。会ったばかりのときはどうすればいいか互いに分からず、心の中では気まずい感じがしていましたが、少し話をしただけで、皆、楽しく談笑できるようになりました。そして、お互いが、興



味のあることや疑問などを口に出して、話し合っていました。そばに座っている生徒をちらりと見ると、言葉

が通じないのに、楽しそうにおしゃべりをしていました。これにはとても微笑ましく思いました。同じ別れでも、農村体験のときとは違い、皆が満面の笑みを浮かべていて、泣きじゃくる姿はありませんでした。冷たく湿った雨が降る中、日本の高校生たちは自分の身が濡れるのも気にせず、校舎から出てきて私たちとの別れを惜しんでくれました。そのときはきっと彼らも、こんな場面でも心の中にもてる情熱を消すことはできないと思っていたに違いありません。

今回の日本研修で、私たちはほかにも元寇史料館、九州国立博物館、マリンワールドの見学、スノーボード体験、それからトヨタの自動車工場や福岡タワーなどたくさんの場所を参観しました。これらはすべて、私の心に残る美しい経験です。自分の目でいままで知らなかった日本の美を見て、自分の体で日本の多元的な社会に触れ、自分の心で日本の美しさを感じました。これまで学んできた日本語も、十分に使うことができました。台湾での空虚な気持が生み出したこの満足感、この感動は言葉に表すことができません。もちろん、その国の習慣や人々の情熱など、日本には台湾が参考とし、学習するに値するものがたくさんあります。いつの日か、この手で日本と台湾の架け橋を作り、この感動をもっと多くの人たちと分かち合いたいと思っています。

——なぜなら、私は本当の日本を体験したからです。

